



Title	sister's daughter婚ノート
Author(s)	甲田, 和衛
Citation	年報人間科学. 1980, 1, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4768
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

sister's daughter 婚ノート

甲 田 和 衛

*Quand fallait-il voir l'Inde, à quelle époque l'époux
des sauvages brésiliens pouvait-elle apporter la satis-
faction la plus pure, le faire connaître sous la forme la
moins altérée?*

Levi-Strauss, Tristes tropiques.

はじめに

私がZD (sister's daughter) 婚にフィールドで、はじめて遭遇したのは、'66年、Mysoreである。すでにSrinivas (1942) によつて、ZD婚を頭に描いてはいたが、ZD婚の系譜作成の作業は、ある驚異を伴っていた。暑さは凌げ、飢えには耐えられても、渴きだけは癒しがたいと体験したのもこの時のことである。その暑さと、通訳を介しての面接の疲れも忘れ、何度か系譜図の描き直しに没頭、完成した時の、南インドも三月の爽やかな朝の興奮は、いまも忘れたい。翌'67年、Guntur調査を経つて「Canarse 村落における sister's daughter marriage」(甲田 1972, 111-133) と「Andhra Pradesh の

ヒンドゥー村落」(甲田 1972, 135-155) を公表した。前者ではZD婚をめぐる'50年代の文献、McCormack (1958) と Dumont (1953, 1957) によるかわる Dravidian kinship terminology をめぐる研究小史を、後者では actual kin によるZD = MB D = FZ S D = …… 婚とそれが近親婚のうち一定の割合をもつ問題を扱った。

'73年 Godavari '75年 Vishakapatnam の両調査を Rao (1973) の協力をえて実施し、その後 Beck (1972) と Carter (1974) を参照し、その結果の一部を公開した (Koda & Rao 1977, 甲田 '1978)。本ノートは、現在報告書準備中の両調査のうち、とくにZD婚をめぐる問題の前記 Mysore 報告 (甲田 '1972) の続編である。Godavari は、インドを南北に分けるといわれる Godavari 河の北辺のフィールドである。どの家族を訪れても、辿っていけば、みいだされるのはイトコ婚とともにZD婚である。Rivers (1907) 以来今日にいたるまでイトコ婚のみが重視されて、南インド固有のZD婚に言及されていることはきわめて稀である。すでにインドでは、'55年、The Hindu Marriage Act によつて、他の近親と同等に、ZDをもよとして4

種の第一イトロコの婚姻を禁止する。しかし、つぎの但し書きをもち、"....., unless the custom or usage governing each of them (the parties) permits of a marriage between the two." 私は「インド家族立法発展年表」(黒木 1966, 174-178)を思い浮べながら、法社会学者は、この"custom"という一字に橋かけているのだろうか、という感慨にとらわれざるをえなかった。

このことは法社会学者にかぎらない。遺伝学者 Sanghvi (1966) は Andhra Pradesh の muslim community に ND 婚と cross-cousin 婚のみがみいだされることをこの項でコメントする。"The local custom of consanguineous marriage in Andhra Pradesh had deeper roots than could be modified by the religious influence that came there at a later stage" (312)。この custom は宗教の影響を越えることがである、といえるだろうか。もともと南と北のインドにおける Brahman の歴史の対比は、古くは Slater (1924) から最近でも Ghurur (1972) にもこの主張がみえる。それらは広く "Aryan-Dravidian Dichotomy" とし、南インドにおける母系制の残存、あるいは kinship exogamy と clan exogamy という典型的な解釈を生み、Held (1935) は Hindustan と Deccan の mythical division を否定しながら、南北インドの社会組織の差異を指摘する結果に終わっている。ZD 婚は幼児婚と同じくインドの Minotaur (Rathbone 1934) ののだろうか。

ZD 婚をふくむ、いわゆる oblique marriage は、ほかに FZ、MZ として BD 婚があり、これら 4 種類の婚姻事例は、なお現在も

みいだされていることは Murdock (1949) の Table 80 を一瞥するだけで充分である。これら 4 種の oblique marriage のうち、FZ と MZ との性関係が禁じられて、BD と ND との性関係が言及されていない——禁止されていない——Levi 記 18 の記述は、よく知られている。ユダヤ人はその姪との婚姻が自由であり、その婚姻は称賛されるべきものとされていた。しかし、FZ と MZ との婚姻の禁止についての、カンタベリー大司教委員会報告 (Report, 1940) はこのように解説する。"Respect for age is a stronger determinant of these Levitical prohibitions, and stronger still is the necessity of obedience of a wife to a husband. Thus a man marry his niece, because an uncle he could claim respect and sometimes obedience from her, and husband he claims reverence and constant obedience. But a man may not marry his aunt, because she has a right to respect from him as belonging to the older generation which is incompatible with the subservience she ought to show as his wife." (25) FZ や MZ 婚の禁止には、年令や上の世代への畏敬が作用しているだろう。しかし BZ や ZD 婚の禁止の強化には、宗教改革を経て、cousin 婚の許可という条件が働いていることもまた歴史のしめすところである。

私どもは、これら 4 種の oblique marriage のうち、どのように FZ、MZ 婚が禁止され、BD、ZD 婚が残存し、とくに私のフィールドとする南インドに ZD 婚がいまも一般に選好されている、という歴史をあきらかにすることができるとは、uncle-niece 婚は、

1850 年にも、カトリックの royal marriage に、それに近い intra-kin marriage は現代の ロンドン にも見いだされるのである (Firth, et al. 1969, 192)。

歴史的再構成

わが国では、「近年になって諸地方、特に東北地方には、叔父姪添いの例が見られ (柳田 1951, 168)」、「……明治の初めごろまでは、大阪府の河内や和泉にも伯父と姪との結婚がおりおりあって、それをサシアタリと呼んでいた……」(大間知 1967, 70)。しかしこれだけの記述では、BZ と ZD の区別はあきらかでない。近時公刊された「伯叔父母と甥姪関係の婚姻」(堀内、1973) 事例 8 は、うち 4 が別紙を欠き不明であるが、残り 4 は、eBD (e=elder) 婚 3、eZD 婚 1 である (69-72)。すべて「……如何ナル事情アルモ叔姪結婚ハ公認スヘキモノニアラストスル……」(71) 明治 7-30 年までの公式文書である。ちようど三宅 (1890) にちつて、日本古代婚姻が、「……今日ヨリ云ハ甚陋醜ナル風俗……其ノ婚姻ノコトニ関スルモノニ就テハまくれなん、えんしーたんとすたでーいす、すぺんさあの社会学、及じらぼつく、たいらあ等ノ著書ヲ見ルベシ、此編ニ學ケタル諸風俗ハ皆外国ニモ例多キコトニシテ決シテ我が国ニノミ限リタル醜俗ニアラザルナリ」(122) と論断されていた時期のことである。

ハ Lubbock 'Tylor' Spencer のうち、まくれなん、は、McLennan の Studies in Ancient History Comprising a Reprint of Primitive Marriage, 1886 を指しつつ、こゝにはあきらかである。

「ウィクトリア科学」への当時の対応の二つとして三宅論文は、
「なはだ興味深いが、私どもはむしろ、この McLennan 流の “conjugal history” の歴史的再構成を、改めて考えなおす必要があるのではないか。なぜなら、この marriage capture につづいて Lubbock の female infanticide につづいて Spencer の、それぞれ McLennan 批判はしげらぐおこつて、McLennan の Morgan 批判 “utterly unscientific character” を、McLennan をついで今日たんなる exogamy/endogamy の造語者にとりかきかへつてくるからである。

exogamy/endogamy をいふ族外婚/族内婚とすれば、その「族」の内実が問題であり、そのいずれが時間的に先行するかが問題の焦点である。たしかに McLennan は、series of phenomena の分析として、“The less advanced of portions of mankind” を exogamy pure から endogamy pure への tribal system に並列した (McLennan, 1865, rep. 1970, 59)。“Morgan は述べた”。“Mr. McLennan found the clan, thum, division, “exogamous”, and the aggregate of clan, thum, division, “endogamous”, but he says nothing about the “endogamy” (Morgan 1877, rep. 1964, 435)。“McLennan の tribal system への approach to caste があり、これは caste と銘記する。私に言へば caste は endogamous であるがそのなかに exogamous division をあつて extended kin である」と考へるものについて、McLennan の tribal system はあつてゐるに疑いがある。Morgan の McLennan への回答の標題 “exogamy/endogamy の “reversal of the position” “……“endogamy” finally gets the better of “exogamy” as an influence for

progress." (435) 41' McLennan の結論 "The order of social development, in our view is then, that the tribe stands first, the gens or house next, and last of all, the family." (111) を受けつけないからである。McLennan の位置の逆転は私にとっては望ましい。なぜなら、caste の sub-caste 化のプロセスの歴史的再構成は不可能と考えるものについては、McLennan のように tribe, gens, family の順序で考えてはならない、という保証はないからである。Morgan がつねに McLennan にたいして "facts" について overtrump であつたにすぎない (Maret 1936, 180) と云ふことと関係しない。

いま歴史的再構成をアイヌの婚姻事例から考えてみよう。アイヌにオジ・メイ婚がおこなわれていたことは、古くから知られている。

「(1) 甥は父方の叔母との結婚は許されるが、母方の叔母との結婚は禁止されている。(2) 姪は父方の叔父との結婚を許されるが、母方の叔父との結婚は禁止されている」(杉浦 1951, 208)。つまり FZ と BD 婚は許されるが、MZ と ZD 婚は禁止される、と杉浦は指摘した。そして、「結婚を禁止された人々……これを拡大すれば母系 lineage になる筈で」、「もし歴史的な研究が出来たら、母系 lineage の存在が一層明確になったかも知れない。」(210) と述べた。しかし名取調査(名取 1943)では、MZ 婚は禁止されるが、FZ、BD、そして ZD 婚が許されており、布村調査(布村 1960)では、ZD 婚は「できるはずだが実例を知らない」(9) と確認されている。ZD 婚が許容されたかどうかは、杉浦の母系 lineage にとって決定的である。そして名取の「沙流川筋通婚表」は貴重なデータではあるが、

意味不明であり、すでに今後この表の再構成の機会はもてそうもない。「叔父・姪の結婚はむしろあつて」(瀬川 1972, 64) という「アイヌの婚姻」の再構成は容易なことではない。

かりに個々の民族誌のデータがより正確なものであつたとしても、Murdock 流の統計的技法によって、歴史的再構成を試みることは無意味である。歴史的再構成とは、先行する社会からの survivals、あるいは一つの社会組織の他への転換を説明しようとするものである。ZD 婚はたしかに MBD 婚と関係する。なぜなら、McCor-mack (1958) 以来、Moore (1963)、Lave (1966)、Rivière (1966)、甲田 (1972) と、ZD 婚が世代を重ねて継起すれば、 $ZD \parallel MBD \parallel FZSD \parallel FMBSD \parallel \dots$ となるからである。ただし、この ZD exchange は極端なばあい、 $MMBD \parallel FZDD$ となる (Hiatt 1965, 41)。これが一つのルールであることはいいがたい。だからといって、ZD 婚と MBD 婚を切離して、南インドの婚姻のうち、もっとも一般的な重要なタイプは cross-cousin 婚であり、ついで ZD 婚である (Banerjee, 1966, 84-85) ということもできない。ZD 婚は母系制の survivals、あるいは母系制から父系制への転換によって説明できるだろうか。

locality

日本古代の「いわゆる近親結婚と母系的族外婚」を分析して、洞はつぎのように結論する。「これらの規制で一見奇異に感ずることは、兄弟姉妹・叔伯姪間の婚姻が、同母・異母、母方・父方を問わ

ず禁忌となっていないことである。……津田博士の言われるごとく、『父方の近親と結婚することが普通であった母系時代の慣習が残っているところへ、母方の近親と結婚し得る父系時代の新習慣も行われて、其二つが共存し、終にそれが混同し』（津田左右吉「古事記及び日本書記の新研究」316）てしまったものであろう。……父系制が一般化したのは大化改新以後のことである。しかも、それによって父系的族外婚の規制は発生しなかった。かくて母系・父系を問わず、近親間の婚姻は禁忌されなくなってしまうわけである。（洞、1959, 262—3）

日本に族外婚も近親婚禁忌の規制も欠いていることを云々する資格は私にない。ただ一例のみとりあげたい。洞によって「母権社会があったと考える方がよいという考え方に今は変わっている」（「有賀、1968, 4」）有賀の立場である。「母系制を確証する資料はなく、父系制の方がはるかに確実であるから、……上代のよばいも、母系制とそれに伴う招婿婚との存在が証明できないとすれば、それは近世の意味の智入りと同じ意味を持つ風俗である」と見る方がより確実である。しかしこれは証明されねばならない。（85）この証明が問題である。有賀の婚姻史のエッセンスは、「そこで親方取婚をよく見るなら、……それゆえこれにはヨバイ婚が未分化の形で含まれている。これはその基盤が村内婚であったからであるが、凝集した形の村内婚であることが、親方取婚に現われていた。それゆえこの凝集した形が同族間の変化によって解けて来ると、それは智入婚の成立する地盤に転換したのである。」〔325〕にあると思う。

有賀の婚姻類型、凝集した形の村内婚と親方取婚、村内婚と智取婚、村外婚と嫁取婚という三類型は相互規定し、相互転換の可能性をもつ。ただしこの相互転換は「一民族文化圏内」に限られ「この限度外においては（すなわち他の民族文化圏に対しては）諸類型の相互転換の互能性はない。」〔335〕。有賀の類型論は、たとえ「かくて現実の社会関係は典型と類型との相互媒介において存在する」〔356〕としても、(1) Conklin (1964:41) の人類学における“type”の使用の三つの多義性 i) paragon, ii) attribute combination (typology), iii) taxon (paradigm) を明確にしている。Conklin からすれば、有賀の類型は“typology”でも“paradigm”でもなく、key に過ぎないということが出来る。(2) さらに凝集した形の村内婚と凝集していない村内婚と、そして村外婚、いずれもなほどこかの近親婚をふくむはずである。二つの村内婚と村外婚における近親婚の率の変化は、「同族間の変化」によって影響をうけるのか、あるいは逆に「同族間の変化」が近親婚の率を規定するのか、いずれにせよ、それは「証明されなければならない」ことではないだろうか。

ここではとくに(2)を問題としたい。なぜならば私のとりあげているZD婚は、第一にカースト、細分化された村の sub-caste においても、それは endogamous のゆえに、村内婚・村外婚から自由である。そして第二に、ZD婚それ自身、近親婚ではあるが preferred marriage であるからである。まずZD婚の率である。Guntur (甲田、1972, 145) で近親婚のうちZD婚は二一・二%、Godavari (甲田、報告書準備中) で一九・八%、ほぼ全近親婚のうち二〇%がZD婚である。

ついでZD婚をどうアブローチするかによって二分される。(1)ZD
‖MBD‖FZSD……か、あるいは(2)ZD‖MBDである。第
一の立場にたつて、ZD‖MBD……婚のZD婚全体からの率を
みれば、Gunter (149)で三四・五%、Gadavariで二一・一%となる。
このアブローチを進めることは、初婚年令、出生死亡率、年令別婚
姻率、夫婦の年令差などによる人口学的simulationモデルによる
ことになる。しかしこのアブローチは、Gilbert & Hammel (1966)
、Hammel & Hutchinson (1974)のようにZD婚はtabooとして取扱
われ、またカースト別集団、あるいはカースト化をどう考えるか
という大きな困難にふさがれる。

この人口学的アブローチに先立って、Burkhardt (1978) はなにも
りもZD婚の率それ自体のデータ収集の可能性を問題とする。ter-
minological kinの問題もあつたながら、Burkhardtは系譜的方法の
限界、系譜収集のはあい同一の深さを——ZD婚の二世代にわたる
oblique marriageとその世代の定義も加えて——疑問とせざるをえ
ないと指摘する (185)。この指摘は正しい。そしてBurkhardtは、
preferred marriageとintravillage marriageは関係がなかつた (ただし
このばあひnon-Brahman groupが村家村落) かつたから、南インド村
落におけるcaste dominanceのstructural baseとしての“local cir-
cle”を提唱する。たしかにKarve (1965) のendogamous circles
あるいは“clan”、あつたはYalman (1967) の“micro-caste”をより明
らかにするものといえる。しかしpreferred marriageとintravillage
marriageとがEpstein (1962) のちあひ関係があり、私のGuntur

ではnon-Brahmanとは関係があるが、Brahman groupは関係しな
い。あつたGodavariではnon-Brahmanのみ村内婚と関係がある。
Burkhardtの“relevant locality”の強調はなお今後の課題である。

ZD婚の第一のアブローチにはZD‖MBD、Rao (1973) があ
る。ZD‖menakodaluとMBD‖maradaluは二つの異なつた
parallelとcrossのrelativeであり、二つの異なつた世代のゆえに、Z
D‖MBDである。それは“local culture”の問題である。にもか
かわらず、ZD婚とMBD婚が並存するのは、rankの問題であり、low
ranking lineageはZD、high ranking lineageはMBDの婚姻をする
からである、と指摘する。このではカーストのrankingが入って
くる。しかしZD‖MBDの指摘は重要である。ただこの二つは、pa-
rallelとcrossのkinの分類の前に、terminologicalとactualのkin、
それも固有のDravidian kinship terminologyの問題が残されて
いる。

ZD‖MBD……とせよ、ZD‖MBDにせよ、いずれも“lo-
cality”の強調は、私にもこのtype marriageの説明にclanを描定した
Radcliffe-Brown (1930) を思い起させる。なぜなら、ZD‖M
BDであれば、“local circle”は二つのcoreとして、権力をまわすunit
fictionとしてのkinshipとなり、ZD‖MBDならはlocal culture
の問題として、Radcliffe-Brownが後に (1962) tabooを扱って、儀
礼的行動の研究は、二つにシンボルと意味の研究に移らざるをえな
い途を辿るからである。そして、ritual purity, ultimate origin of
purity, pure womenを描定したとあつた、あつたといふYalman (1967)

の言葉は正確である。"Thus, a sister's daughter marriage, far from being antithetical to cross-cousin marriage, appears as a superb logical extension of the principles inherent in cross-cousin marriage." (351) の言葉が昔々の survivals であるか否か。私どもは symbol system の研究を続けたい願いをこの機会に同僚の、今この computer simulation に提供可能なデータを収集しようとするが、この computer simulation に必要でない。現在おびじりえたデータは、(1) Brahman の preferred marriage であるが村外婚である。(2) non-Brahman のいざれかといふは、この婚が高率であり村内婚である。(3) locality group への non-Brahman の権力をめぐって、これ Majumdar (1926) の "pseudo-Rajput" の Srinivas (1952) の言葉で借りて、これを "pseudo-Brahmanization" といふべきである。

引用文献

- 有賀喜左衛門、1968 「婚姻・労働・若者」 著作集 VI
Banerjee, B. 1966 Marriage and Kinship of the Gangadikara
Vokkaligas of Mysore.
Beck, B. E. F. 1972 Peasant Society in Konku.
Burkhardt, G. 1978 Marriage Alliance and the Local Circle among
some Udayars of South India, in American Studies in an Anth-
ropology of India, ed. by S. Vatuk, 173 - 210
Carter, A. T. 1974 A Comparative Analysis of Kinship and
Marriage in South Asia, Proceedings of RAI for 1973, 29 - 54.

- Conklin, H. C. 1964 Ethnogenealogical Method, in Explorations
in Cultural Anthropology, ed. by W. H. Goodenough, 25 - 55.
Dumont, L. 1953 The Dravidian Kinship Terminology as an
Expression of Marriage, Man 54, 34 - 39.
Dumont, L. 1975 Hierarchy and Marriage Alliance in South
Indian Kinship, RAI Occasional Papers, No. 12.
Epstein, T. S. Economic Development and Social Change in
South India.
Firth, R. et al. 1969 Families and their Relatives.
Ghurye, G. S. 1972 Two Brahmanical Institutions, Gotra and
Charana.
Gilbert, J. P. & E. A. Hammel 1966 Computer Analysis of
Problems in Kinship and Social Structure, AA, 68, 71 - 93.
Hammel, E. A. & D. Hutchinson 1974 Two Tests of Computer
Micro-simulation: The Effect of an Incest Tabu on Population
Viability, and The Effect of Age Differences between Spouses on
the Skewing of Consanguineal Relationships between Them, in
Computer Simulation in Human Population Studies, ed. by B.
Duke & J. W. MacCleuer, 1 - 14.
Held, G. J. 1935 The Mahābhārata, an Ethnological Study.
Hiatt, L. R. 1965 Kinship and Conflict.
原 價 1959 「日本母權制社会の成立」 新版
堀江 雄 (譯) 1973 「西洋近世身分社会」 第一卷 婚姻編 I。
Karve, I. 1953 Kinship Organization in India.
Koda, K. & M. K. Rao 1977 Marriage Regulations in South
India-Cultivator, Fisherman & Tribe of Andhra Pradesh. (mimeo-
graphed)
甲田和衛 1972 「インドの婚姻規制」 大阪大学文学部記要 xvi, 57
- 160.

- 中田和徳 1978 「カーヌト論序説」 今西龍岡博士古稀記念論集
「社会科学人類学」7-21
- 黒木三雄 1966 「婚姻法の近代化」
- Lave, J. C. 1966 A Formal Analysis of Preferential Marriage
with the Sister's Daughter, Man, 1, 184-200
- Majumdar, D. N. 1926 Pseudo-Rajputs, Man in India, vi, 155 -
173
- Maret, R. R. 1936 Tylor.
- McCormack, W. 1958 Sister's Daughter Marriage in a Mysore
Village, Man in India xxxviii, 34-48
- McLennan, J. F. 1970 Primitive Marriage (1st ed. 1865)
三訂増補 1890 「日本古代婚姻法研究材料集」東京人類学雑誌V, 44,
9-17 46, 65-71, 47, 117-122.
- Moore, S. F. 1963 Oblique and Asymmetrical Cross-Cousin
Marriage and Crow-Onaha Terminology, AA, XLV, 296-311.
- Morgan, L. H. 1964 Ancient Society (1st ed. 1877).
- Murdock, G. P. 1949 Social Structure.
全訳増補 1943 「汎流川筋」ハインスの家紋と婚姻」民族学研究
第1, 1-11.
増補一犬 1960 「世々の結婚—異邦の婚と」「分組織」民族学研究所
XXIV, 234-248
- 大間俊輔三 1967 「婚姻の民族学」
- Radcliffe-Brown, A. R. 1930 The Social Organization of Austra-
lian Tribes, Oceania Monograph, No.1.
- Radcliffe-Brown, A. R. 1952 Structure and Function in Primi-
tive Society.
- Rathbone, E. F. 1934 Child Marriage: The Indian Minotaur.
The Report of a Commission appointed by His Grace the Arch-
bishop of Canterbury 1940 Kindred and Affinity as Impediments

- to Marriage.
- Rivers, W. H. R. 1907 The Marriage of Cousins in India, Journal
of the Royal Asiatic Society, 611-640.
- Rivière, P. G. 1966 Oblique Discontinuous Exchange: A New
Formal Type of Prescriptive Alliance, AA, XLVIII, 738-740.
- Sanghvi, L. D. 1966 Genetic Adaptation in Man, in The Biology
of Human Adaptability, ed. by Baker, P. T., Weiner, J. S., 305 -
328.
- 藤川豊十 1972 「ハインスの婚姻」
- Slater 1924 The Dravidian Element in Indian Culture.
- Srinivas, M. N. 1942 Marriage and Family in Mysore.
- Srinivas, M. N. 1952 Religion and Society among the Coorgs of
South India.
- 杉浦健一 1951 「汎流ハインスの親族組織」民族学研究 XVI, 187 -
212
- Yalman, N. 1967 Under the Bo Tree.
- 柳田國男 (編) 1951 「民族学辞典」